第 21 回年次大会予稿

複数館種を対象とした高校生の図書館利用行動に関する実態調査

Factual research of library using behavior in high school students

小野永貴^{1,2*}, 徳光亜矢子¹, 下山佳那子², 佐藤翔³

Haruki ONO^{1,2*}, Ayano TOKUMITSU¹, Kanako SHIMOYAMA², Sho SATO³

1 お茶の水女子大学附属高等学校

Ochanomizu University Senior High School

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

E-mail: ono.haruki@ocha.ac.jp

2 筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科

Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2

E-mail: milkya@slis.tsukuba.ac.jp

3 同志社大学 社会学部 教育文化学科

Faculty of Social Studies, Doshisha University

〒602-8580 京都市上京区新町通今出川上ル

*連絡先著者 Corresponding Author

近年、学校図書館の連携に関する実践が盛んである。特に高等学校の場合、公共図書館が学校を支援したり、大学図書館が高校生向けに開放する等の事例も増え、高校生が複数館種を相互に活用できる機会も多い。しかし、実際に生徒が各館種をどう使い分けているか、実態は明らかでない。そこで本研究では、高校生28人を対象としたフォーカス・グループ・インタビュー調査を実施した。全発話内容の書き起こしと分析を行い、高校生が複数の館種を使い分ける際の基準となりうる要素を抽出した。

Recently, library cooperation is being tried by many school libraries. The cooperation between public library, university library and school library is possible for high school library. However, it is not clear how high school students are seeking information from these libraries. We conducted focus group interviews of 28 high school students, and analyzed sentences of dialogs. Finally, we considered about what is merit or demerit for high school students in each library type.

キーワード: 学校図書館, 高校生, 情報探索行動, フォーカス・グループ・インタビュー

school library, high school students, information seeking behavior, focus group interview

1 はじめに

近年、学校図書館が近接する他の図書館と連携する試みが、多数行われている。特に高等学校においては、スーパーサイエンスハイスクール事業の実施等により、特定分野に特化して高度な教育実践が行われることも多くなったが、予算規模や人的配置上、これらの高度教育に学校図書館だけで全て対応するのは困難である。そのような際に他の館種の図書館との連携体制があれば、生徒の学習機会を大きく広げ、個々の関心に応じて探求をより深められる可能性もある。

連携対象の館種としては、小・中学校図書館の場合、公共図書館との連携が数多く実践されている。(資料の相互貸借や物流システムの構築、ブックトーク・訪問授業やスタッフ派遣など。)また、高等学校図書館の場合、前述のような教科教育の高度化に伴い、専門的資料や人的サポートを求めて、公共図書館のみならず、近接する大学図書館との連携も注目され始めている。実際に、高校生が近接する大学図書館を利用できる体制をとる学校もあり、そのような学校に所属する高校生は、学校図書館・大学図書館・公共図書館の3館種にまたがって、目的に応じて相互に使い分けて学習をすることができる。

このように、学校図書館が複数の館種と連携を行うにあたり、具体的にどのような連携を行うのが効果的であるのか、様々な施策が工夫されている。しかしその多くは、学校司書・司書教諭をどのようにサポートするかといった司書の人的支援の観点や、資料の団体貸出・授業での一括利用の円滑化といった資料物流の観点など、図書館運営側の視点での工夫が多かった。確かに、これまでの他館連携の中心であった小・中学校の場合、生徒が能動的に複数の図書館を使い分けて資料を

選別しながら学習を行うことは難しく、授業や到達目標に応じて教員側が他館活用の時間を設定し、明示的に利用を促すことが主な活用形態であったと考えられる。しかし、高等学校の場合は、生徒自身が館種毎の蔵書やサービスの違いをある程度認識し、目的に応じて使い分けている生徒も少なからずいるのではないだろうか。このような、生徒が複数の図書館を用いて情報を探索する際の「情報探索行動」の観点から生徒の利用実態を調査・把握し、その上で他館連携の施策・工夫を検討した学校図書館の実践は、過去に例がない。

そこで本研究は、複数の図書館を使い分けて学習を行いうる高校生が、どのように図書館を使い分けて情報探索を行っているか、実態を明らかにすることを目的とする。特に、過去の先行事例が少ない学校図書館と大学図書館・公共図書館の使い分けに着目し、調査を行う。これらの調査を通し、学校図書館が他館と連携を行う際に、有効な施策を検討できるような、基礎的な要素を抽出することを目指す。

2 先行事例

これまで、学校図書館と公共図書館が連携し、児童・生徒が相互の図書館を活用した教育実践は数多く行われてきたが、学校図書館と大学図書館の相互利用・連携の試みは数少ないと考えられる。そこで、本研究では大学図書館と学校図書館の相互利用・連携の事例について、先行事例の調査を行った。

三重県津市では、平成16年度から3年間、文部科学省より委嘱を受けて「学校図書館資源共有ネットワーク推進事業」を実施した。この事業は、津市教育委員会の要請のもと、三重大学附属図書館が社会・地域連携の一環

として参画し、学校・公共・大学図書館の3者が連携して学校図書館向上を図った試みである。具体的な実施内容は、中井らにより次のように報告されている[1]。「大学図書館職員の専門性を生かした情報リテラシー支援を中心とした活動を行ってきた。（中略）学校図書館の状況においては、運営に不可欠な専門知識やスキルが不足しがちであること、またそれに対し専門職としての大学図書館職員の参加が予想した以上に有効であるということが把握された。」

このように、この事例は大学図書館による学校図書館の運用面のサポートが中心であり、委員会等での専門的アドバイスや、学校図書館関係者に対する講習会開催が、主な実施内容であったことが述べられている。また、上記論文中では大学図書館側の職員が学校図書館の活動（保護者等ボランティアによる巡回指導、読み聞かせ等）を見学し、意見交換を行いつつも、「実際に大学図書館として支援できることはほとんどなかった」とも述べられており、度重なる議論を行いつつ「大学図書館がすべきことを模索した」と、連携施策検討の難しさが指摘されている。

その他の事例としては、2008年の中戸川の論文[2]において、相模女子大学附属学校での学校図書館・大学図書館の連携施策の検討過程が報告されている。この論文中では、学校図書館・大学図書館の連携事例を、次の5類型に分類している。

- (1) 児童図書室の設置（大学図書館内へ生徒・児童が利用できるスペースの新設）
- (2) 人的支援（学校図書館の司書・司書教諭を対象としたレクチャー等）
- (3) 資料貸出（大学図書館の所蔵資料を一時的に学校図書館へ一括貸出して補

充）

- (4) 大学図書館と学校図書館の連携（大学図書館を高校生が利用できる、もしくは大学生が学校図書館を利用できる。）
- (5) 授業利用（授業のクラス単位で大学図書館を訪問し利用する）

中戸川は論文の考察において、まず考えられるのは(1)としつつ、将来的には(4)の本格的連携へ移行したいと述べており、高校生が大学図書館も含めて複数館種を使い分ける連携施策は、将来的課題と位置づけられている。また、この研究ではインタビュー調査も実施されており、その結果、学校図書館と大学図書館の連携において大事なこととして、「大学図書館員が学校図書館を知ろうとし、大学図書館からアクションを起こすこと」「上司をうまく説得すること」「学校図書館を利用する教員の意識と、学校図書館司書のアピール」の三点が挙げられている。

いずれの先行事例においても、連携先の図書館側の立場からの視点、もしくは学校図書館を運営する立場からの視点で検討されており、主たる利用者となる学校の生徒の視点では、実態の調査がなされていない。

3 調査方法

3.1 対象

複数の館種を利用可能な高校生が、どのように情報探索を行っているか明らかにするために、本研究の目的を満たすA高等学校の生徒を対象としたインタビュー調査を実施した。調査対象のA高等学校は、総合大学の付属学校であり、大学キャンパスと近接した位置に高等学校の校舎がある。大学図書館も高等学校校舎から徒歩圏内に位置し、付属高

等学校の生徒も大学図書館の施設・蔵書を利用可能なよう、高大連携が長期にわたって実施されている。

3.2 手法

集団面接法の一つである「フォーカス・グループ・インタビュー」を用いた。フォーカス・グループ・インタビューとは、特定の属性に適合する複数人の被験者を集め、司会が話題を提示しながら被験者相互に自然な会話を行わせる中で、本意の発話を抽出する質的調査手法である。本手法は、グループダイナミクスを利用することで、調査対象の深層の意見を自然な発話から収集することができる。また、他の調査手法に比べて、準備から実施、集計までのプロセスが早いことも利点とされている。

今回の場合、質問紙調査により個々の生徒の日常行動を聞き取る手法も考えられたが、高校生の図書館利用行動の種別や類型を最初から想定することは困難であったため、予め質問項目を指定した画一的な質問紙調査は適さないと判断した。また、面接に慣れていない高校生を被験者とするため、質問者と一対一で聞き取りを行う個別面接法は、必要以上に被験者に緊張感を与えてしまうと予測され、潜在的な本意を引き出しにくくなることを避けるために、集団面接法を採用することとした。

3.3 被験者の属性

インタビューは5回に分けて実施し、それぞれ異なる属性の生徒を被験者として集め、近い属性の生徒同士で議論が促進されるよう設定した。具体的に、各回における被験者の属性は表1の通りである。

なお、A高等学校は1学年あたり定員120名

の小規模校であり、被験者の合計人数28名は、全校生徒の約7.8%のサンプルに相当する。

表1 インタビュー各回の被験者属性

回	被験者の属性・人数
1	一般生徒（1年生）7名
2	図書委員生徒（2年生）6名
3	図書委員生徒（1年生）5名
4	一般生徒（1年生）7名
5	図書館常連利用生徒（2・3年生）3名

3.4 インタビュー形態

インタビューは、A高等学校図書室内の区切られた小部屋で実施し、1回あたり45～90分の時間を要した。被験者に謝金の支払いは行っていないが、緊張感の緩和のため茶菓子を提供した。話題制御を行う司会は、本研究代表者の小野が務めた。また、全てのインタビュー内容について、ボイスレコーダーによる発話音声の録音、ビデオカメラによる会場映像の録画を行いつつ、研究協力者によって話題概要の速記を行った。

3.5 聞き取り内容

フォーカス・グループ・インタビューでは被験者同士の自然な会話が重視されるため、司会による積極的な議論への介入は行っていない。原則的に、会話のきっかけとなる話題の提供や問いかけ、および会話内容の要約や話題のまとめを行い、会話内容が調査目的から逸脱した場合のみ、議論への介入を行った。

具体的に、会話のきっかけとして提示した話題は、主に以下の通りである。

- 自己紹介および、学校の図書室をどのように日常利用しているか
- 各教科の授業の課題等で図書館を利用

することはあるか。また、その場合にはどのように資料を探索するか。

- 近接する大学図書館や公共図書館は利用するか。また、どのように利用しているか。
- 資料を探索する際に、各図書館のOPACやレファレンスサービス等の各種情報サービスは利用しているか。

4 調査結果

4.1 概要

全インタビューの音声・映像記録（合計約375分間）に対して、発話内容の書きおこし作業を行い、合計6,480文の発話記録を得た。なお、各被験者の発話内容の他に、他者の発話に対して同意・疑問を示す態度をとった者や、多数の者が共感する雰囲気であった場合など、特徴ある場面の状況も記録した。そのうえで、次の手順で発話内容の傾向を分析した。

1. 各発話に対して、話題としている館種のタグ付けを行った。（学校図書館・大学図書館・公共図書館の3種を想定）
2. 各発話内容から、各館種の使い分けの基準となりうる要素を抽出し、おおまかなコーディングを行った。
3. これらを実施しながら、当初想定していなかったタグやコードが発話中で出現した場合、適宜追加・修正を繰り返した。
4. 上記結果をもとに、各館種ごとに抽出された要素を、「利用する理由・利用場面・期待感」（プラス面）および「利用しない理由・利用を避ける場面」（マイナス面）の2種類にわけ、全記録の中で繰り返し頻出したものを傾向としてまとめた。

4.2 分析結果

全体的な傾向として、学校図書館以外に利用する図書館としては、公共図書館への支持が大きいことが多数の発話で確認された。一方、調査対象校は高校生も大学図書館を利用できるよう連携を行っているにも関わらず、生徒による大学図書館の利用に関する発話は数少なく、限定的であった。具体的に、各館種の使い分け基準として抽出された主要要素を、プラス面・マイナス面にわけて傾向をまとめたものが表2である。

4.3 考察

表2のような館種ごとの傾向があらわれた理由を、筆者らは以下のように考察した。

まず、自宅居住地の近くの公共図書館は、転居しない限り幼少期から長期にわたり利用し、熟知し使い慣れ、安心感をもたれていると考えられる。一方、学校図書館は進学に応じて次々変わるうえ、大学図書館に至っては利用経験がないため、コレクションやサービスに対する認識度が低く、利用が定着していない傾向にある。特に、大学図書館については蔵書構成やサービスの専門性を知らずに、学校図書館・公共図書館と同レベルの感覚で資料を探索し、期待していた資料が無く失望感を抱いた生徒が多かった。これは、館種の特性認識の不足によるミスマッチが生じていると解釈できるであろう。一方、空間・施設的には大学図書館を有効活用している生徒も確認された。これまで図書館は「飲食禁止で静かに読書する場」という固定観念を抱いていた中で、ドリンクを飲みながら会話をしつつグループ学習ができる大学図書館内のスペースに、新たな利用価値を自主的に見出したことが考えられる。

表2 書きおこし記録から抽出された館種ごとの使い分け要素

	利用する理由・利用場面・期待感	利用しない理由・利用を避ける場面
学校図書館	各教科の授業課題での図書利用／教科学習に最適化された排架の工夫／静寂な自習室／学校司書との会話／他生徒とのコミュニケーション／ベストセラー書でも早く入手可能（リクエスト・予約）	蔵書数の少なさ／図書持ち運びの重さ（電車通学等による）／中学校時代とのギャップ／資料探索失敗経験による信頼の低さ／OPAC や排架順に対する誤解・認識不足／図書室のメンテナンス不足
大学図書館	歴史書・社会学書等の専門的資料／新聞バックナンバーの利用／映像資料などの多様なコレクション／会話・グループ学習ができる学習環境	専門書ばかりで難易度が高い印象／期待した資料が無かった失望体験／職員の案内やサービスについての不信／サービスや OPAC についての誤解／距離・時間的問題
公共図書館	蔵書量の豊富さ／幼少期からの長期利用による安心感／OPAC や排架順の熟知／OPAC や予約・取り寄せシステムの充実／レファレンスサービスでの成功経験	ベストセラー書の入手困難性／蔵書量・種類の過多（多すぎてむしろ探しづらい・使いづらい）

その他、レファレンスサービスや司書との会話等の人的側面について注目すると、学校図書館と公共図書館ではプラス面での発話があったことに対し、大学図書館ではマイナス面の発話を確認された。これは、高校生の大学図書館利用に対して、職員側にも理解が不足している点があり、適切な支援が行えていなかったことが推測される。

5 結論

本研究では、学校図書館・大学図書館・公共図書館の3館種を利用可能な高校生に対し調査を行ったが、単純に近接する図書館の利用権を与えるだけでは、有効活用ができていない実態が明らかになった。今後は、館種ごとの特性認識や、各館種の強みをいかした有効活用を促す指導を行うことが、必要であると考えられる。また、円滑な活用を支援するためには、生徒に対する指導だけでなく、館種を超えた職員側での人的連携・情報共有も必要であると考えられる。

本研究では使い分けの基準となりうる要

素を抽出したが、今後は各要素間の関連性や階層関係など、構造化を行うことが課題となる。また、これらの要素について、多様な環境下の学校でも同様の傾向が現れるか、質問紙調査等で広く検証することが望まれる。

謝辞

本研究の一部は、お茶の水女子大学附属高等学校が文部科学省受託研究として実施した「平成24年度 確かな学力の育成に係る実践的調査研究」の一環として実施しました。事業関係者の皆様には多数のご助言・ご支援を頂き、心より御礼申し上げます。

参考文献

- [1] 中井えり子；伊東直人；佐藤義則：大学図書館の学校図書館支援事業，大学図書館研究，78，p. 105-113，2006.
- [2] 中戸川陽子：大学図書館と学校図書館の連携にむけて，学校図書館学研究，10，p. 77-82，2008.